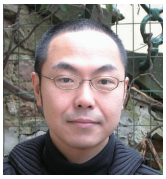
生き続ける都市と建築

第3回

ルッカの古代ローマ円形闘技場遺構



黒田泰介 | 関東学院大学建築・環境学部 教授

はじめに

前回のローマ編ではナヴォーナ広場の原点となったドミティアヌス競技場をはじめ、古代ローマ建築の遺構が、その特徴的な形態を残しながら再利用された事例を紹介した。今回はローマ建築の中でも、巨大なコロッセウムに代表される円形闘技場（アンフィテアトロ）に注目する。

円形闘技場で繰り広げられた剣闘士競技や猛獣狩りは、ローマ市民にとって最大の娯楽であった。中規模以上の都市の多くは劇場や円形闘技場を備え、地元の名士による出資のもと、盛んに興業が行われた。西ローマ帝国の滅亡後、放棄された建物は建築資材の採掘場と化し、装飾や大理石の板材、円柱等は持ち去られたが、ローマン・コンクリートでつくられた円形闘技場の強固な構造体は長期にわたって残存し、楕円形平面を残しつつさまざまな姿で再利用された。今回はこうした再利用事例の中でも最も印象的な、イタリア中部・トスカーナ州の都市ルッカの円形闘技場遺構を取り上げてみたい。

ルッカの都市と建築

ルッカは、中世の街並みをすっぽりと取り囲む、ルネサンス期の市壁で知られている[写真1]。1625年に完成した市壁は、小国ルッカが生き残りをかけてフィレンツェ共和国、後のトスカーナ大公国の脅威に対抗して建設したものだ。15世紀半ばに登場した新型火砲は、都市の外観を一変させる。それまでの高くそびえる中世の石の壁は、大砲の攻撃には脆かったのである。都市を襲う攻城砲に対しては、分厚い土手をレンガで強化した壁体と堀割で守りを固め、幕壁に近づく敵には、突出したスペード型の稜堡（りょうほ）から放たれる十字砲火で対抗した。低く構えたハリネズミのようなルッカの市壁は、フィレンツェに向かう東側に稜堡が密集し、特に念入りに防御態勢が取られている。

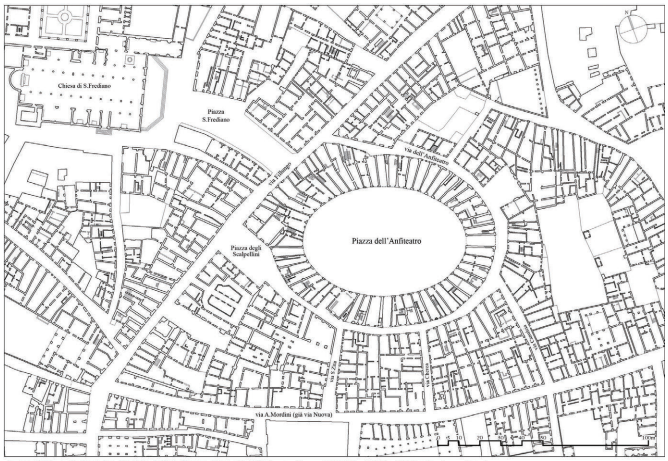
完備されたルッカの市壁だが、実は一回も実戦を経験していない。ナポレオン失脚の後、ルッカを治めたマリーア・ルイーザ・ディ・ボルボーネの時代に、市壁の平和利用が図られた。宮廷建築家ロレンツォ・ノットリーニは、市壁の上にプラタナスの並木道を設け、一周約4.2kmの巨大な都市公園をつくりあげた（1818年頃）。複雑な

写真1　ルッカ全景。ルネサンスの市壁に包まれたローマ期の道路網（©google）

写真2　サン・ミケーレ・イン・フォロ聖堂（13世紀）

写真3　アンフィテアトロ広場の眺め

写真4　円形闘技場街区 広場への東側入口



Lucca: Rilievo planimetrico d'isolato dell'Anfiteatro (stato attuale) *basato sulle opere di I.Belli.Barsali, R.Silva. V.G.Bartoli per le zone dintorni

図1　円形闘技場街区　平面図

国際政治の中、1847年まで独立を保ったルッカを守り続けた市壁は、今日ではジョギングや犬の散歩を楽しむ市民たちの憩いの場として親しまれている。

ルネサンス期の市壁に囲まれた街の中心部には、ルッカの起源である古代ローマ植民都市に由来する、格子状の街路網がくっきりと刻まれている。ローマ期の都市開発はチェントゥリアツィーネと呼ばれる、日本の条里制・条坊制にも似た、東西南北の方位に沿った直交グリッドに従って農地開発および都市計画が行われた。東西軸と南北軸が交差するローマ都市の中心広場フォールムの跡地には、ロマネスク様式のサン・ミケーレ・イン・フォロ聖堂（13世紀）が建つ[写真2]。ファサードを飾る繊細なアーケードと色大理石モザイクの象眼装飾は、隣町ピサのロマネスク建築からの強い影響を受けている。聖堂の傍らには四角い鐘楼がそびえ立ち、麓の広場を見下ろす。古代ローマからの伝統を引き継ぐサン・ミケーレ広場では、中世から19世紀前半まで、大きな食料品市場が開かれていた。

サン・ミケーレ広場から、ローマ期のカルド（南北方向の大通り）に相当するフィッルンゴ通りを北へ進もう。ルッカのメインストリートであるフィッルンゴ通りには、中世の塔や優雅なパラッツォに加えて、曲線主体の植物的なデザインで飾られたリバティ様式（イタリア版アールヌーボー）の店舗が軒を連ねており、バラエティに富んだ街なみは道行く人の目を楽しませてくれる。

アンフィテアトロ広場

フィッルンゴ通りの傍らに広がる、スカルペッリーニ広場に面した背の高いアーチをくぐると、そこには楕円形平面のアンフィテアトロ広場が広がる[写真3]。頭上には丸く切り取られた青い空が開け、狭い中世の道を歩いてきた後に、清々しい開放感をもたらす。広場を取り囲む、なめらかな曲線を描く壁は色とりどりに塗り分けられ、地上階に並ぶ半円アーチは広場にリズミカルな連続感を与えている。広場に並ぶカフェの屋外席では一休み中の観光客が談笑している。

この場所にはかつて、コロッセオのような古代ローマ円形闘技場が建っていた。ローマ滅亡後、放棄された円形闘技場は紆余曲折の末、最終的に円環状の1街区を形づくった[図1]。広場を横切って東側入口を抜けると、建物外壁には石灰岩の大アーチや角柱が残されている。壁面各所に見られるヴォールトの断片とともに、これらはまさしく円形闘技場由来のものだ[写真4]。

以下、今日に至るまでの、ルッカの円形闘技場遺構の変遷の過程をたどってみよう。

古代ローマ円形闘技場

円形闘技場は紀元後2世紀始め頃に都市の北側、アッピア街道に続く都市外道路の傍らに建設された。矩形の街区が整然と並ぶ都市平面に楕円形の大規模建築を収める難しさ、また市内外から集まる大勢の観客をスムーズに受け入れるためにも、円形闘技場は市壁の外部に建設された。

円形闘技場の規模は外部寸法107×79m（長軸×短軸）、外周には2層のアーケードが取り巻いていた[写真5]。競技の場である中央のアレーナは67×39mで、これを取り囲む観客席は2万人弱の観客を収容したといわれる。アレーナを取り囲むすり鉢状の観客席、観客席を支えるヴォールトとアーケードによって構成される円形闘技場は、都市ルッカを象徴する記念建造物として偉容を誇った。

写真5　円形闘技場街区 北東部に残る2層のアーケード

遺構の要塞化

西ローマ帝国の崩壊後、イタリア半島はアルプスを越えて侵入した異民族によって支配される。6世紀よりルッカを拠点として、トゥシア（トスカーナ地方の古名）を支配したゲルマン系のランゴバルド族は、円形闘技場遺構の内部に占領軍の本部を置いた。遺構は都市支配のための要塞として、また部族集会の会場として利用された。中世初期における遺構の呼称「パルラッショ」は、討議（伊語でパルラーレ）の場に由来している。要塞としての転用は、円形闘技場遺構の再利用方法の内で最も早く現れたものであり、コロッセオをはじめとして各地で見られた。

アンフィテアトロ広場東側入口の左手には、アーケードの開口部を丸みを帯びた大礫を積み上げて封鎖した箇所がある。この石材は、都市の北側を流れるセルキオ川の岸辺から採取されたと言われており、その素朴な構法からも、この壁面は最初期の再利用である要塞化当時のものと考えられている。

遺構の住居化

中世のルッカは、ローマからフランスに至る中世ヨーロッパの大動脈、フランチージェナ街道上に位置する宿場町として、さらには絹織物の生産・取引によって大いに栄えた。遠くパリへと続く街道に接続する都市の北側、市壁外の地域には、10世紀頃よりフィルンゴ通りを軸として「ボルゴ」と呼ばれる居住区が形成された。

円形闘技場の西側に位置するスカルペッリーニ（石工の意）広場の名称は、中世期に遺構がボルゴ建設を支える、建築資材の採掘場として使われていたことを示す。12世紀に再建されたサン・フレディアーノ聖堂では、身廊の円柱18本とファサードを覆う白い大理石は、フィルンゴ通りの反対側に位置する円形闘技場遺構から運ばれた転用材と考えられている。

半ば朽ちたアーケードが黒々と開口するその姿から、円形闘技場遺構はいつしか「グロッタ（洞窟）」と呼ばれるようになっていた。遺構は、あたかも都市周辺にある自然地形の一種としてみなされたのである。9世紀の史料によれば、サン・フレディアーノ教会の司教は、アレーナを分割した菜園と一緒に、グロッタ内に設けられた住宅を市民向けに賃貸していた。

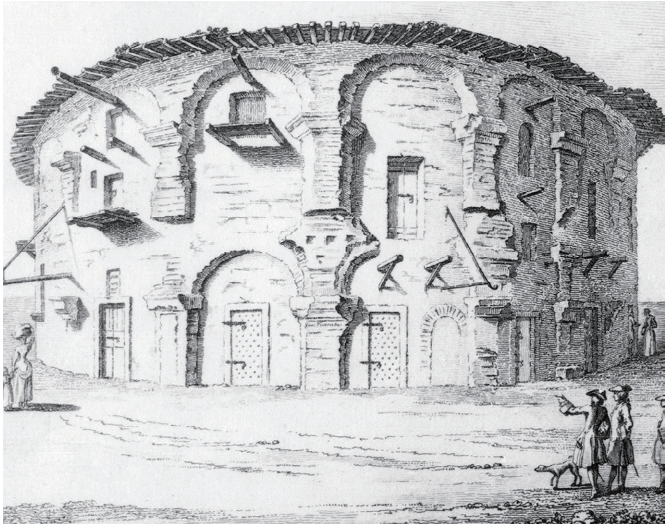


図2　住宅や店舗に転用された円形闘技場遺構（18世紀の版画）

写真6　住宅内部に残るローマン・コンクリート造のヴォールト

円形闘技場遺構の住居化は、ボルゴの形成と合わせて急速に進行していった。第1回で述べたように、中世のイタリア都市では「スキエラ型住宅」と呼ばれる単スパン、長方形平面の都市型住宅が主流だったが、放射状に配置された構造壁に挟まれた幅4〜5m、長さ15mほどのくさび形平面の単位空間「クネオ」はスキエラ型住宅への転用にぴったりだった。地上階は店舗や工房等に、上階は住宅や倉庫として使われた［図2］。街区北東部の、2層のアーケード［写真5］を封鎖した箇所は、市の所有地として監獄や公共倉庫として利用された。一方でアレーナは菜園や庭園、家畜小屋などで分割・占拠され、当初の形態を失っていった。

住居化にあたっては、傾斜した観客席とヴォールトを取り壊しつつ、既存構造壁の上に積み増しして、水平な木造床を設けながら高層化していった。このため、クネオおよび円形闘技場の楕円形が街区平面に継承された。均質なクネオを基につくられたにもかかわらず、

図3　メルカート広場（19世紀の版画）

写真7　円形闘技場街区の外壁

各住宅の階高・軒高・意匠はまちまちであり、驚くほど豊かな多様性を見せる。北側入口近くの住宅内部には、観客席を支えていた傾斜ヴォールトの断片が残されている。ローマン・コンクリート造のヴォールトが架かる室内は、まさにグロッタの名にふさわしい［**写真6**］。

ルッカの円形闘技場街区の場合、1クネオを利用したスキエラ型住宅は8件、2〜3クネオを利用したリネア型住宅は13件、4クネオ以上を利用したパラッツォは4件存在する。ボルゴ内の近隣街区と同じく、円形闘技場街区においてもリネア型住宅が主流を占めることから、遺構の再利用による住宅と通常の住宅建設との間にさしたる区別は無かったことが読み取れる。ローマン・コンクリート造の強固な構造体を利用して居住空間が挿入される姿は、現代集合住宅のスケルトン・インフィルの考え方と酷似しており、興味深い。

食料品市場への再開発

母マリーア・ルイーザの跡を継ぎルッカ公となったカルロ・ルドヴィーコ・ディ・ボルボーネは都市衛生に配慮して、サン・ミケーレ広場にあった食料品市場を街外れの円形闘技場遺構内部へ移転することを決定する。この公共事業を任されたロレンツォ・ノットリーニは、観客席上に建つ中世の住宅群をそのままに残しながら、アレーナを占拠する建物や庭園を撤去し、楕円長軸上にある東西2つの当初からの入口に加えて、南北に2つの入口を新設、計4つの出入口をもつ楕円形平面のメルカート広場［**図3**］をつくりあげた。

1838年に工事は完了、ノットリーニは長年にわたる建築行為の堆積を、ひとつながりの美しい円環としてまとめ上げた。翌年10月1日に食料品市場（メルカート）が開設されると広場は店舗群で埋め尽くされたが、市外への市場移転後、元の姿へと戻った。アンフィテアトロ広場と改名された広場は、街区住民の共用中庭であると同時に、ルッカを代表する都市空間として親しまれている。

ノットリーニによる都市的介入は、遺構上への長年にわたる建築行為を再編し、その活性化に見事成功した。円形闘技場街区の壁面には、古代のアーケードを塞ぐ中世の壁に開口する窓辺に、植木鉢の花や色とりどりの洗濯物が並ぶ。そこには今日に至るまでの都市の歴史、1800年余の時間の堆積を、幾重にも積み重なるレイヤーとして見ることができる［**写真7**］。今日も現役の生活空間として生き続ける円形闘技場遺構は、都市の歴史の貴重な証人である。

参考文献
T.Kuroda, Lucca 1838. Trasformazione e riuso dei ruderi degli anfiteatri romani in Italia, Maria Pacini Fazzi editore, Lucca, 2008.

写真2〜7…著者撮影

くろだ・たいすけ
1967年東京都生まれ。1995〜98年M.カルマッシ建築設計事務所。2000年東京芸術大学大学院修了。博士（美術）。関東学院大学建築・環境学部教授。専門は建築再生計画（レスタウロ）。著書に『LUCCA 1838』（Maria Pacini Fazzi Editore、2008年）、『イタリア・ルネサンス都市逍遙』（鹿島出版会、2011年）、共著に『リノベーションからみる西洋建築史』（彰国社、2020年）など

自習型認定研修の設問

設問1

ルネサンス期の市壁を特徴付ける要素は次のどれか。

a. 矢狭間
b. 稜堡
c. 跳ね橋

設問2

円形闘技場遺構の再利用方法として実現しなかったのは次のどれか。

a. 要塞化
b. 住居化
c. 工場化

認定教材の設問への回答は、CPD情報システムのページ
https://jaeic-cpd.jp/
にアクセスのうえ、お願い致します。

※不正解の場合は、単位に登録できない場合があります。
※自習型教材の選択欄における会誌『建築士』選択項目は、平成28年1月より建築士会会員のみの表示項目になります。